



わあいらんど三宅島の繁栄は「元商工業者の和

夏の風物詩と言えばあなたは何を思い浮かべるだろうか。風鈴の音、虫の光、花火、地域や人によつてさまざまだが、大抵の人が思い浮かべるのが夏祭りではないだろうか。地域の人が集まり、浴衣姿で盆踊りを踊る。屋台から流れてくる焼きそばや綿あめの香りに高揚感を覚える人も少なくないはずだ。

やつてきた、夏の風物詩



ここ三宅村でも、夏の風物詩である「マリンスコレ21フェスティバル」が七月二七日（土）午後三時より、ふるさと体験ビレッジ駐車場にて開かれました。この祭りは、三宅村の商工会が主体となって行なう祭りであり、今年で十九回目を迎える。この日は午前二時頃から雷を伴う大雨が島全体を襲つていたため、開催を心配する声もあったが、無事に開催することができた。

祭りの内容は、オープニングセレモニーから始まり、ステージ上で行われるモノマネショウ、郷土芸能、宝くじ大会などであった。その中でひときわ印象的だったのは、神着郷土芸能保存会による木遣太鼓と伊豆青年団による天神太鼓だった。どちらも太鼓を介して二人で向かい合い、ぴたりと呼吸を合わせて勢いよく太鼓を叩く。二人とも同じタイミングで叩いているのに演奏中に目が合うことはほとんどない。太鼓が透き通っているのではないか、そう思われるくらい洗練された技術を目の当たりにして驚く一方で、その域

に到達するには一体どれほどの練習を積んだのだろうかと考えると頭が下がる。演奏が終わつた後には、会場一杯の拍手は勿論のこと、アンコールの声も挙がつたほどだ。

太鼓と同じくらい大きな盛り上がりを見せたのは、ラッキー宝くじ大抽選会だ。村長や議長が箱の中から数字を見せたのは、ラッキー宝くじ大抽選会だ。村長や議長が箱の中から数字の書かれたボールを四つ取り出し、その四桁の数字があらかじめ購入した抽選券に押されたスタンプの番号と一致していたら豪華な景品がもらえるというもので、なんと特等は十五万円分の海外旅行チケットであった。段々と数字が一致していくにつれて会場のあちらこちらで悲鳴や歓声が聞こえ、非常に大きな盛り上がりを見せていました。

また、夏祭りにおいて大きな楽しみの一つであるのが、野外での食事だ。ステージの周辺ではかき氷、焼きそばといった祭りの定番メニューからムロツケなど郷土料理までさまざまな食べ物の屋台が並び、味と匂いで祭りを一層色鮮やかに彩っていた。

そして、祭りの最後には錆ヶ浜港棧橋からおよそ六〇〇発の花火が打ち上げられた。七色に三宅の空を染めたその花火に観客は酔いしれ、最後の一發

2013年
(平成25年)
7月28日
日曜日

あしたばん編集部
発行所: 加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第三十八号

が打ち上げられた時には祭りのファーレを惜しむかのように大きな歓声と拍手が送られた。夏は長いようで短く、この夏は二度戻つてこない、だからこそ尊い。誰もがそんな夏の訪れを感じた一日であった。

（長富将成）

ムロツケ作りに潜入 —祭りが育む人の繋がり—



も、ひとつ容器に味噌はそれぞれ分け入れておくといい。些細な、しかし生活に必要なこと一つひとつをしっかりと伝え、若手が学んでいく。何気ないやりとりの中に、暮らしが代々受け継ぐ島の女性の絆の強さを感じた。

想いが交差する場所で

以前からとても気になっていた。派手な色遣いのデザインとその獨特な形、島外の人間から見ても三宅らしくないと感じる建造物。その正体は、七月三日に落成式を迎えた三宅島阿古船客待合所だつた。

The image shows the Kurobe Dam Visitor Center, a modern architectural structure with a dark, angular facade and large glass windows. The building has a flat roof with a slight overhang. In front of the building is a paved area with several orange traffic cones and a white crosswalk. To the left, there's a tall, thin utility pole. The sky is clear and blue.

は、島のシンボルであるアカコッコが羽を広げて島民や船客を迎える様子をイメージされて作られたものである。一〇〇人以上収容できそうなその大きさは、すぐ隣にある旧待合所と比べたら明らかだ。

歩き続けること

「ることも大事だよね。」と、待合所の話から島の事まで話を広げて語つてくれた。

たくさん人の想いが詰まつてなられた新しい待合所で、誰もが気球ちよく島を行き来してくれると良いと願い、待合所を後にした。

海を一望でき、天気の良い日は絶冒だ。そんな新しい待合所について、この日初めて待合所を利用した坪田山身の女性にお話を伺つてみたところ、「初めて見た時には一休何かわからなかつた。まさか待合所だとは思わなかつた。」と話してくれた。初めて利用した感想については、「涼しくて非常に快適だし、人がたくさん集まっていると活気がある。でも、おみやげのスペースを増やしたり、まだ子どもを良くしていける所もたくさんあるよね。この待合所のように三宅らしくないもので島を盛り上げる方法もあるけど、三宅らしいもの、既存の物を活かして島を盛り上げようとするだ。

遊歩道を歩きながら五八八年の噴火の話を聞くと、目の前に広がる溶岩の景色でかつて何が起ったのか実感が湧いた。阿古の集落で生活していた人たちのこと、避難時の家族の様子や噴火後の暮らしについて聞いていると、女将さんを始めとする阿古地区の人、そして島で生きる全ての人がどんなに多くのことを乗り越えて今の生活をしているのかが、ひしひと伝わってきた。とある朝、女将さんがいつものように歩いていると、空高くに大きな虹が

A black and white photograph of a woman standing on a wooden boardwalk in a coastal landscape. She is wearing a light-colored long-sleeved shirt and dark pants, looking towards the horizon. The boardwalk leads through a field of low-lying plants towards a distant shoreline under a cloudy sky.

早朝は、景色が開けた見晴らしのいい道を歩いても、なかなか人の姿が見当たらない。健康のために始めたといふが、誰も見ていないところでひとつことをコツコツとやり抜くことは、何事もむずかしい。「自分に勝つてしんどいよね」。それを囁きしめながら「しんどさ」と向き合う女将さんの根性は、歩くことなどまらず、彼女の生活の細部にまで染み込んでいるのだろう。

三宅島十夏

ズリサーチ!

(龍山千里)

12日	午前 みやけ小で 宿題	午後 大学で 図工		
13日	みやけ中で 宿題	大学で 絵		
14日	みやけ中で 宿題	大学で 写真		
15日	大学で 宿題	大学で 図工		
16日	みやけ小で 宿題	大学で ムービー		
17日	大学で 宿題	大学で 新聞		
18日	大学で 発表会		×	

今年の夏に、二年生の藤文俊研究室が「**三宅島の海岸における生物多様性調査**」を実施するため、慶應義塾大学加藤文俊研究室が三宅島に訪れることが決まりました。去年から開始した本プロジェクトは、三宅島に暮らす小中学生らを中心対象に、さまざまな学びの場を提供す

掛かつてゐたという。自分のまえに広がる雄大な景色を独り占めしたような気分で、とても感動したそうだ。島の風景を目にしながら女将さんの話を聞いたことで、自然に恵みを受けながらともに生きていく、覚悟を据えた島への深い愛情を感じた。

(龍山千里)

三宅島十夏

＝キッズリサーチ！

カメラを持たせれば、その独創性や彩感覚に驚かされる。一緒に外を歩けば、抜け道やお気に入りの場所を教えてくれ、新たな三宅島の魅力に気付けてくれる。キッズリサーチでは、もが先生であり、誰もが生徒なのである。誰にとっても、学びの場となる二回目となる今回のキッズリサーチは、二〇一三年八月十二日から十五日までの七日間に行なわれる。その三日の数日は三宅小学校と三宅中学校に張することが決定しているため、開